

鹿児島県立甲南高等学校

地球規模でものを考え行動する 21世紀薩摩スチューデントの育成

【構想の概要】

国内外の「人口問題に起因する諸問題」の解決を目指し、食・環境・ビジネス・観光をサブテーマに課題研究を行う。また、海外派遣事業を実施し、他国の生徒と問題点の共有、発表、討論等を行う。これらの研究活動により、地域・世界の持続可能な発展に寄与する積極的な提案が可能な21世紀薩摩スチューデントを育成する。

また、上記の目標を達成するため3年間の課題研究を中心に添えた計画を作成し、「課題研究のための教材開発」、「課題研究及びグローバル・スキルの評価」、「大学や企業、公的機関等との連携」、「フィールドワークや成果発表の場としての国内外研修」、「生徒の発表方法の改善や発表機会の拡充」に関して研究開発を行う。上記の取組をとおして、教員のさらなる授業力向上、学校変革を行う。

鹿児島県立甲南高等学校 SGH 概要

PLAN 地球規模でものを考え行動する21世紀薩摩スチューデントの育成

21世紀 薩摩スチューデント 人口問題に起因する諸問題の解決を目指し、国内外の事例を参考に論理的思考を用いて地域・世界の持続可能な発展に寄与する積極的な提案ができる **グローバル・リーダー**

DO **Wazze Konan!! - Innovation Project -**
【課題研究、海外派遣事業、グローバル・スキルの向上】

メインテーマ 人口問題 **サブテーマ** 食 環境 ビジネス 観光 **Local Global**

課題研究・・・調べる まとめる 提案する
1年 国内外課題把握、事例研究
2年 ポスター発表、論文・プレゼン
3年 学会発表等

海外派遣事業・・・発表する 広げる
1年【学びの場】フィールドワーク
2年【学びの場】UK プレゼン発表

グローバル・スキルの向上・・・考える 協力する 発信する 伝える
授業 **Active Learning** グローバル化に対応した授業 **発表力** 国内外大会での課題研究発表 **英語力** CEFR B1, B2

他機関との連携 東京大 鹿児島大 広島大 和歌山大 台湾蘭陽女子高 台湾師範大学 MLL HILL SCHOOL 南日本新聞社 マジミュージカル7カマー

CHECK ① Can-doリストによる評価
② 運営指導委員会による事業評価

ACTION ① SGH事業の内容・運営の改善
② 地域トップ校として、他校への情報発信

GOAL 現在の課題を理解し、持続可能な発展に寄与する教養・実践力を持ったリーダーの輩出
国際化に重点を置くスーパーグローバル大学・海外大学への進学

鹿児島県立甲南高等学校 2019年度教育課程表

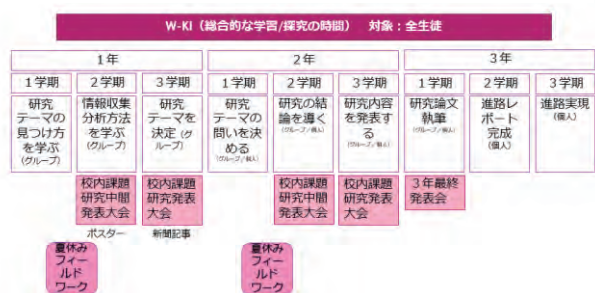
年 度	2019年度								備 考						
	学 年	1年	2年	3年	計	学 年	1年	2年		3年	計				
新 課程	英語総合	④4	5				5	5							
	現代文B	4		3	2	4	3	7	5						
	情報B	4		3	3	3	2	6	5						
	世界史A	●②							0, 2						
	世界史B	●④	4	①	④	⑤		4, 8	0, 6						
	国 語	国語A	②2						0, 2						
	国 語	国語B	④4						0, 6	0, 6					
	地 理	地理A	②2						0, 2						
	地 理	地理B	④4						0, 6	0, 6					
	現代社会	②2	2						2	2					
	倫理	2							0, 2						
	政治・経済	2							0, 2						
	新 課程	数学I	③3	3					3	3					
数学II		4	1	3	3	3		7	4						
数学III		5			1		5		6						
数学A		2	2			1	1	3	3						
数学B		2		2	2	⑤	1	2, 4	3						
物理基礎		②2	2			①		2	2, 3						
物理		4				⑤		0, 7							
化学基礎		②2				①		2, 3							
化学		4				3		4	7						
生物基礎		②2	2			①		2	2, 3						
生物		4				④		0, 7							
地学基礎		②2						3							
*生物探究		3		1			2		3						
*地学探究	2					2		2							
新 課程	体育	⑦7-1	3	3	3	2	2	8	8						
	保健	②2	1		1			2	2						
	音楽I	②2						0, 2	0, 2						
	音楽II	2						0, 2							
	美術I	②2						0, 2	0, 2						
	美術II	2						0, 2							
	工業I	②2						0, 2	0, 2						
	工業II	2						0, 2							
	家庭I	②2						0, 2	0, 2						
	家庭II	2						0, 2							
	英語総合	③3	4					4	4						
	英語総合	4		5	3			5	3						
	英語総合	4					4	4	4	4					
英語総合	2	2					2	2							
英語総合	4						0, 4	0, 4							
英語総合	2						0, 2	0, 2							
英語総合	2						0, 2	0, 2							
英語総合	②2	2					2	2							
情報社会と情報	②2	1	1	1			2	2							
科目単位数合計	32	33	33	33	33	33	98								
W-VIプロジェクト	2		1			1	4								
合 計	34	34	34	34	34	34	102								
ホームルーム	1		1			1	3								
道 徳 日 本 社 会 科	35	35	35	35	35	35	105								

◎は必修科目、○は必須選択科目、●は世界史と世界史の必修選択科目

課題研究をとおしたスキル育成

本校では、課題研究を中心にした3か年計画を立てた。1年は課題研究の進め方を学び、生徒は自分の関心のある研究テーマを決める。2年からは本格的な研究を個人で行い、3年次には英語で研究論文を執筆する。(図1)

図1 甲南高校課題研究年間計画



SGH 対象生徒：1年全員 320人，2年 40人，3年 40人

研究を進める中で、合計6回の校内での発表機会を設定した。これらの発表をとおして生徒は、課題研究の進捗状況の確認、論拠が明示されているか等課題研究の筋道の確認を行うことができ、またスライド等プレゼンテーションによる表現力・コミュニケーション能力、周りの人と協力して発表会を実施する協働力を身につけることができた。さらに、発表会で学んだことの振り返りと次の計画を立てることの重要性の認識することができた。この校内発表を繰り返しながら、課題研究を行なうことで、生徒は課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身につけていく。

そして、課題研究の発表の場を主な目的としている2年3学期の国内外研修(英国、広島大、和歌山大)では、学校で学び研究してきたことを発表することで得られる達成感はもちろんのこと、プロセスの大切さ、「学び」の大切さを実感する場にもなっており、それが生徒の主体的な進路研究にもつながっている。このことは、本校が行っている「SGH アンケート」において、学習活動で身についたこととして「主体性」「課題発見」に対して「当てはまる」、「ややあてはまる」と答えた生徒は全て8割を超え、SGH非対象の生徒との差も顕著で、課題研究の意義を理解していることからわかる。(図2)

図2 「SGHアンケート」抜粋

(数字は%)		主体性		課題発見	
質問番号	年	1	2	8	9
SGH 対象者 (40人)	H28	85.0	87.5	90.0	82.9
	H29	87.5	92.5	87.5	72.5
	H30	91.4	89.1	91.8	83.7
その他 (273人)	H28	77.9	78.1	86.6	60.2
	H29	83.4	78.2	86.1	64.7
	H30	79.0	75.9	82.6	61.6

(対象3年 H30. 2月)

大学や企業等からの協力による効果

大学や企業等からの協力による効果は主に2つある。まず、生徒は、大学の先生から専門的なアドバイスや協力を得ることができる。専門知識の他、論拠のはっきりとしたストーリーのある研究の進め方、仮説を検証するためのフィールドワーク・実験等の手法についても助言をいただく。鹿児島大学の先生方からは継続的に課題研究に対する指導助言を受けており、生徒が課題研究の道筋を作るサポートにもなっている。そして生徒は、研究や社会情勢について最新の情報を得ることができる。現在の高等教育の教育内容や、企業等から社会の最新トレンドを知ることによって生徒だけでなく本校職員の多角的な視野・考えにつながっている。

学校における変革

SGH指定当初は、課題研究の指導ができる職員がほとんどおらず、職員は指導方法や指導力向上のため外部指導をとおして学んだ。おかげで、課題研究や発表の指導や運営方法についての知識や経験が学校に蓄積されてきた。

本校職員はSGH事業の他、アクティブラーニング型の授業を行うために、全教科で研究を続け、輪番で研究授業を学校外にも公開してきた。年複数回職員研修を行ってきた。これらの経験をとおして「将来、生徒が身につけるべき能力を考えたとき、高校現場ではどのような授業・事業を行うべきか」全職員で考えるようになった。職員の変容によってカリキュラムマネジメントを全職員で考えるきっかけとなっている。